令和6年神審第29号

裁 決

貨物船AモーターボートB衝突事件

受 審 人 a

職 名 A船長

海技免許 四級海技士（航海）

受 審 人 b

職 名 B船長

操縦免許 小型船舶操縦士

本件について、当海難審判所は、理事官小嶋正博出席のうえ審理し、次のとおり裁決する。

主 文

受審人 a の四級海技士（航海）の業務を1か月停止する。

受審人 b を戒告する。

理 由

（海難の事実）

1 事件発生の年月日時刻及び場所

令和6年6月20日12時28分少し過ぎ

和歌山県和歌山下津港

2 船舶の要目

船 種 船 名 貨物船A

モーターボートB

総 ト ン 数	4 9 9 トン	
全 長	7 3 . 0 2 メートル	
登 録 長		6 . 3 3 メートル
機 関 の 種 類	ディーゼル機関	電気点火機関
出 力	1 , 4 7 1 キロワット	8 4 キロワット

3 事実の経過

Aは、船橋前部中央に操舵スタンドを、その右舷側にレーダーを、左舷側にGPSプロッターをそれぞれ装備した全通二層甲板船尾機関室型の鋼製砂利・石材運搬船兼貨物船で、a受審人ほか5人が乗り組み、空倉のまま、船首1.8メートル船尾3.4メートルの喫水をもって、令和6年6月20日11時55分和歌山下津港外港の和歌浦湾の錨地を発し、同外港の北港沖第1岸壁に向かった。

a受審人は、12時20分頃昇橋して一等航海士から引き継いで単独の船橋当直に就き、ヘッドアップ表示で3海里レンジとしたレーダーを作動させ、12時21分少し過ぎ和歌山北港西防波堤灯台（以下「西防波堤灯台」という。）から208.5度（真方位、以下同じ。）1.6海里の地点で、針路を336度に定めて自動操舵とし、12.8ノットの速力（対地速力、以下同じ。）で進行した。

a受審人は、操舵スタンドの後方に立った姿勢で操船に当たり、12時26分僅か前西防波堤灯台から248.5度1.3海里の地点に達したとき、正船首1,000メートルのところ、Bを視認することができ、その後、同船が同じ方向を向いて移動しないことから、漂泊していることが分かる状態で、Bと衝突のおそれがある態勢で接近する状況であったが、一等航海士から他船に関する引継ぎはなく防波堤も近かったので、前路に航行の支障となる他船はいないものと思い、見張りを十分に行わなかったため、このことに気付かなかった。

こうして、a受審人は、Bを避けることなく続航し、着岸に備えて自動操舵から手動操舵に切り替え、減速を始めたところ、12時28分僅か過ぎ右舷船首至近に同船を認めたものの、どうすることもできず、12時28分少し過ぎ西防波堤灯台から272.5度1.4海里の地点において、Aは、原針路のまま、12.6ノットの速力となったとき、その右舷船首部がBの右舷船首部に、前方から平行に衝突した。

当時、天候は曇りで風力3の西南西風が吹き、潮候は上げ潮の初期にあたり、視界は良好であった。

a受審人は、衝撃を感じなかったため、衝突に気付かないまま和歌山下津港外港の北港沖第1岸壁に着岸し、その後海上保安庁からの連絡により衝突の事実を知り、事後の措置に当たった。

また、Bは、船体中央やや後方に操舵室を設け、同室右舷側に舵輪、その後方に操縦席が設置され、舵輪右側に機関遠隔操縦装置を装備した総トン数5トン未満のFRP製プレジャーモーターボートで、b受審人が1人で乗り組み、家族1人を同乗させ、いずれも救命胴衣を着用し、釣りの目的で、船首0.3メートル船尾0.7メートルの喫水をもって、同日05時00分和歌山下津港の係留地を発し、和歌山県有田市初島町西方沖合の釣り場に向かった。

b受審人は、05時15分釣り場に到着し、移動しながら釣りをを行い、11時00分釣り場を発進し、和歌山北港海釣り公園西方沖合の釣り場に向かった。

b受審人は、目的の釣り場に到着し、11時48分少し過ぎ衝突地点付近で、船首を156度に向け、機関を停止して漂泊を開始した。

b受審人は、左舷方に向けて座った姿勢で、同乗者は、右舷後方に向けて座った姿勢でそれぞれ釣りを始め、12時26分僅か前衝突地点で、船首が156度に向けていたとき、正船首1,000メートル

のところ、Aを視認することができ、その後同船が衝突のおそれがある態勢で接近する状況であったが、釣りをすることに気をとられ、見張りを十分に行わなかったため、このことに気付かなかった。

こうして、b受審人は、Aに対して避航を促す音響信号を行うことも、更に接近しても衝突を避けるための措置をとることもなく漂泊を続け、12時28分僅か過ぎ船首至近に迫った同船を認め、同乗者が機関を始動しようとしたものの間に合わず、Bは、船首が156度を向いたまま、前示のとおり衝突した。

衝突の結果、Aは、右舷外板に擦過傷を、Bは、右舷外板に亀裂等をそれぞれ生じ、b受審人が右肩打撲傷等を、B同乗者が左足打撲傷等をそれぞれ負った。

(航法の適用)

本件は、和歌山下津港において、航行中のAと釣りをを行いながら漂泊中のBとが衝突したもので、衝突地点付近は港則法が適用される水域であるから、同法の適用について検討する。

Bは、釣りをを行いながら港内で漂泊しており、釣りも漁ろうに含まれると解されることから、港則法第10条に基づく同法施行規則第6条（停泊の制限）及び港則法第35条（漁ろうの制限）の適用が考えられるが、同規則第6条において、船舶が港内においてみだりにびよう泊又は停留してはならないのは、ふ頭、棧橋、岸壁、係船浮標及びドックの付近並びに河川、運河その他狭い水路及び船だまりの入口付近の船舶交通がふくそうしているため一般船舶の係留又は出入りが妨げられるおそれがある場所であり、また、同法第35条において、みだりに漁ろうをしてはならないのは、特に船舶交通のふくそうする場所及び時間帯であり、いずれも港則法が適用される港内における停留及び漁ろうを全面的

に禁止しているものではなく、Bが漂泊していた地点は、船舶交通がふくそうしているため一般船舶の係留又は出入りが妨げられるおそれがある場所ではなく、特に船舶交通のふくそうする場所及び時間帯でもなかったことから、同法施行規則第6条及び港則法第35条の適用はない。

また、Aは汽艇等以外の船舶、Bは汽艇等に該当することから、港則法第18条第1項の適用が考えられるが、航行中の船舶と漂泊中の船舶との衝突を避けるための具体的規定ではないことから、同条同項を適用するのは適当ではない。

港則法には本件に適用できる航法規定がないことから、一般法である海上衝突予防法が適用され、同法には両船の関係について規定した条文がないので、海上衝突予防法第38条及び第39条の船員の常務により律するのが相当である。

(原因及び受審人の行為)

本件衝突は、和歌山下津港において、着岸予定岸壁に向けて航行中のAが、見張り不十分で、漂泊中のBを避けなかったことによって発生したが、Bが、見張り不十分で、避航を促す音響信号を行わず、衝突を避けるための措置をとらなかったことも一因をなすものである。

a 受審人は、和歌山下津港において、着岸予定岸壁に向けて航行する場合、前路の他船を見落とすことのないよう、見張りを十分に行うべき注意義務があった。しかるに、同人は、一等航海士から他船に関する引継ぎはなく防波堤も近かったので、前路に航行の支障となる他船はいないものと思い、見張りを十分に行わなかった職務上の過失により、前路で漂泊中のBに気付かず、同船を避けることなく進行して衝突を招き、A及びB両船に損傷を生じさせ、b 受審人及びB同乗者を負傷させるに至った。

以上の a 受審人の行為に対しては、海難審判法第 3 条の規定により、同法第 4 条第 1 項第 2 号を適用して同人の四級海技士（航海）の業務を 1 か月停止する。

b 受審人は、和歌山下津港において、釣りのため漂泊する場合、接近する他船を見落とすことのないよう、見張りを十分に行うべき注意義務があった。しかるに、同人は、釣りをすることに気をとられ、見張りを十分に行わなかった職務上の過失により、衝突のおそれがある態勢で接近する A に気付かず、避航を促す音響信号を行うことも、衝突を避けるための措置をとることもなく漂泊を続けて同船との衝突を招き、A 及び B 両船に損傷を生じさせ、B 同乗者を負傷させ、自らも負傷するに至った。

以上の b 受審人の行為に対しては、海難審判法第 3 条の規定により、同法第 4 条第 1 項第 3 号を適用して同人を戒告する。

よって主文のとおり裁決する。

令和 7 年 3 月 1 3 日

神戸地方海難審判所

審判長 審判官 阪 本 義 治

審判官 大 北 直 明

審判官 前 田 昭 広